

經濟論叢

第123卷 第1・2号

マルクスにおける生産諸力の概念について(2)……平 田 清 明	1
自由保有地における 旧体系の壊顔と慣習保有地の情況 ……………尾 崎 芳 治	24
国債発行と資本蓄積 ……………池 島 正 興	54
ヒュームの学問・技芸論 ……………田 中 秀 夫	82
The Engineering Magazine と原価管理…………田 井 修 司	99

昭和54年1・2月

京都大學經濟學會

マルクスにおける生産諸力の概念について (2)

——生産諸力の弁証法——

平 田 清 明

目 次

- I 序にかえて——表象と概念のはざまに——
- II 資本の生産力と労働の生産力
 - 1 資本の生産力の形態性
 - 2 労働の本質諸規定
- III 労働の社会的生産力
 - 1 社会的生産力の諸規定
 - 2 社会的生産力の倒錯性と変革性 (以上前号)
- IV 生産諸関係と生産諸力 (以下本号)
 - その要点開示——
- V 集合的労働者の概念
 - 資本の生産力の主体的本質——
- VI 潜勢としてのコミュニズム (以下次号)
 - 資本の生産諸力の弁証法的旋回——
- VII 結語にかえて
 - 人間力と自然力との回復——

Intermezzo

マルクスにおける生産諸力の概念を、彼の未完の労作『資本』に焦点をあわせて、追思惟すること。これが本稿の試みようとする課題である。

この試みにおいて筆者は、まず指摘した——生産力という語の日常的表象と、経済学の基礎範疇としてのその社会科学的な概念との間に、容易には解消しがたい懸隔があること、を。この懸隔、このはざまに、あえて立つことによって、筆者は、(資本の生産力として実存する)労働の生産力のプロブレマティークを開示しようとした。

この労働の生産力の理論的追跡、とくに、労働の社会的生産力の諸規定の検出は、これら諸規定によって浸潤された生産諸力の倒錯性を検証した。そして、この倒錯性の検証がまた、実は生産諸力の変革性の弁証そのものでもあることが、続いて確認された。

本号では、前号での以上の記述のうちにも既に現われていた理論的な諸問題を、あらためて、その枢要点につき説明を加えることによって、前号との連繋を保持しつつ、新論点の開示に進むことにする。

そこで特に取りあげるのは、まず最初に「生産諸関係と生産諸力」という古くして新しい基本論点である。そして、その再検討のうえでの「集合的労働者」の概念である。この概念において、資本の主体的本質が再反省されてこそ、生産諸力のもつ社会＝歴史変革における決定的意義が、つまり生産諸力の生産諸関係に対する根底的な規定性が、解明されうる、と私には考えられるからである。そればかりではない。このことを通じてこそ、ブルジョア的生産諸関係の批判的に内在的な解明の一步一步は、ことごとく、資本の生産諸力の弁証法的旋回（すなわちコミュニズムとしてのその実現＝過程）の不可避性を、連綿として弁証するものであること。これが概念把握されるからである。

未完の『資本』が語りだそうとしたものは、本質的に未完のことがらであり、その明示するところは、その黙示するところにおいて補完されている。明示は黙示においてこそ生きるべく位置されているのである。まことに『資本』は、この明示と黙示の弁証法に託された革命家の理論書たるものである。

IV 生産諸関係と生産諸力

——その要点開示——

生産諸力は生産諸関係において成立し運動する。人類史のいかなる段階の経済的社会構成も、この生産諸関係と生産諸力との相互規定において実存する。人類のブルジョア時代は、その社会的生産諸関係の独自の展開におけるその物質的生産諸力の発展によって特徴づけられる。

ここにあっては、生産諸力は資本の生産力として実存する。前号で指摘したように、この実存の根拠(=本質)として、労働の社会的生産力が実在するのである。しかしそれは、そのものとしてのブルジョア社会の日常意識にとらえられない。それは「労働としての労働ではなく資本に属する諸力」として人目に映っている。「労働のあらゆる社会的生産諸力は、この資本に属する諸力として、しかも資本自身の胎内から生まれた諸力として現象している。」(K. III 881 ⑬ 1161)

この労働の生産力の物化(=疎外)を媒介するブルジョア生産諸関係が、いまここでは、批判的=総括的に開示されなければならない。

それが開示されてこそ、人類のブルジョア時代における資本の物質的生産力は労働の社会的生産諸力の物化そのものに他ならぬことが了解される。つまり、資本の生産力の物神的性格が批判的に解明される。我々が本稿において主たる引照基準としている『資本』は、社会的生産諸関係の批判的=歴史的省察が生産諸力の物神性すなわちその転倒性の批判的照明であることにより、この生産諸力それ自体における転倒性の内的克服の必然性を告知するものである。

我々はここで K. コシークの『具体性の弁証法』を再び想起してよい。彼は、「科学(経済学)と哲学(弁証法)との関連という問題が『資本』の核心をなしている」と主張し、『『資本』は言葉の普通の意味での経済学的著作ではない』ことを強調した。彼にとってマルクスの『資本』は、「経済学的諸範疇のうちに隠されている内的な核を顕現する批判的分析」の書なのである。したがって、次の事が着目されねばならぬのである。「その分析が科学の水準にとどまろうとする時にも、この分析は同時に、それら諸範疇の確定的な姿態を、隠された本質の必然的な外化として示さなければならない。」(前掲邦訳、194-5 ページおよび225-6 ページ参照)

ここで K. コシークが「隠された本質の必然的な外化」と定義するものは、前号での我々の規定では、資本の物質的生産力たる顕勢(エネルゲイア)のうちに隠された本質(ヴェーゼン)としての潜勢(デュナミス)の顕現に他なら

ない。経済学的諸範疇としての現象諸形態の敵対的諸矛盾を揚棄する他ない社会的潜勢力の自覚的展開。これが、社会階級としての、プロレタリアートの階級闘争に他ならない。この意味での階級闘争の書として『資本』は書かれたのである¹⁾。

i 生産・交通・領有諸関係の分節＝連節構造

拙稿でこれまで社会的生産諸関係または単に生産諸関係という用語で示してきたものにつき、以下に最小限必要な注意事項を記す。

近代市民社会において、それを構成する経済的人格たる私的所有者の相互関係は、直接には「交通諸関係」として存在する。労働生産物が商品の規定性において存在し、この商品という物象の交換においてこそ、その所有者たる私的諸人格の私的労働相互間の社会的関係が実存する。したがって、商品物象の交換関係としての交通諸関係は、その商品の本源的生産者たる私的所有者相互間

- 1) 理論における階級闘争の視座の欠落を自己批判したL・アルチュセールが、この視座の深化のために執筆した論稿「マルクス主義と階級闘争」において、更めて次の事を確認したのは、ここに指摘するに値するであろう。「『資本論』を読む一つの方法、……完全にブルジョア的な方法が存在する。……たとえば『資本論』を、資本主義の生産様式の政治経済学の理論として、次のようなやり方で読むことができる。まず下部構造から始まる。《労働過程》が検討され、《生産諸力》と《生産諸関係》とが区別され、商品、貨幣、剰余価値、賃金、再生産、地代、利潤、利子、利潤率の傾向的低落、等々が分析されるであろう。要するに『資本論』の中に経済（資本主義的）の諸《法則》が悠々と発見されることになるであろう。そしてこの《経済的な》メカニズムの分析が終わると、社会階級、階級闘争という小さな付録が余分に付け加えられるであろう。」

このようなブルジョア的な読み方をこそ拒否するために、マルクスはあらかじめその主旨に「政治経済学批判」という副題を与えていたのであり、この表題は単に「古典経済学の批判」だけでなく「経済主義的（ブルジョア的）幻想の批判」を意味していた。「マルクスは一方に生産と交換の活動（経済）を、他方に社会階級、政治闘争等々を、注意深く分離するブルジョア的幻想を根底から批判しようとした。」したがって彼にとっては「すべての経済学的現象は最終的に、すなわちその《外見》下では、階級関係であり、敵対的な階級関係、したがって階級闘争の関係である社会的諸関係のもとで行なわれる諸過程である。」

「階級闘争がマルクスの科学的理論における《決定的な環》である。」と強調するアルチュセールが、その最深の根拠としてあげるのは「生産諸関係が生産諸力の中に浸透する」、「生産諸力は生産諸関係の歴史的実存形態である」ということである

このアルチュセールの最近時の見解は、これまで対立してきたK・コシークの見解に意外ほど近い。自著『資本論を読む』のうちに（理論偏重主義）の誤謬を確認したアルチュセールが、『資本論』は徹頭徹尾、階級闘争の書として読まれるべきものと再定置したのは、彼が良心的であることにおいて理論的であることを物語るものであろう。（L・アルチュセール『自己批判』所収、1978年福村出版 108-115ページ）

の社会的生産諸関係の発現形態であり、前者は後者に規定されて存在し、かつ、後者によって根源的に起動される。生産諸関係は、この意味で交通諸関係の基底たるものである。しかしそれは、あくまで交通諸関係の実践的反照規定として存在するものであり、交通諸関係をはなれては存在しえない。両者は、日々の経済的实践のうちで不断に分節され、かつ過程的に統一され連節される。この分節＝および連節（すなわち articulation）をなすものとして、「生産＝および交通諸関係」という範疇が成立する。そしてこの範疇は、しばしば、生産諸関係という短縮語で表現される。

したがって生産諸関係という語は、この総体の短縮語であると同時に、この総体の直接的実存形態たる交通諸関係から区別され、それを現象形態とする本質たる狭義の生産関係を指示する語でもある。そしてこのことそのもののうちに、生産諸関係の根源性＝総体性が示されている。

しかし交通諸関係が生産諸関係から相対的に独自にとりだされるとき、それはすでに自己自身のうちに固有な「領有（分配）諸関係」を内生させている。交通諸関係が資本たる貨幣と労働力たる商品との交換関係であるとき、また、資本と資本との交換関係であるとき、これら両者を同時に含む現実的交通関係は、資本相互間での社会的総生産物の領有＝分配関係であり、それはまた、資本家と労働者との間での生活諸手段の再分配関係である。この意味において、交通諸関係もまた「交通（＝および領有）」諸関係の短縮名に他ならぬ。

したがってまた、生産諸関係は、上記の生産＝および交通（領有）諸関係を包括する総過程の短縮表現でもありうる。逆に、それらの総体は「社会的再生産過程」（または「社会的生活過程」）としての過程の統一のうちにあるものと把握される。そしてかかる過程的統一のうちに連節した上記の社会的諸連関係は、「社会の経済構造」を形成する。

ここに「構造」とは、分節し、かつ連節する生産・交通・領有諸関係の重畳である。それは「鱗状構成 imbrication」という名にふさわしい。また、社会的再生産過程の諸契機をなす生産・交通・領有の諸過程は、相互に区別される

ものであることによって継起的に包摂される過程をなす。この意味においてそれは「入り子構造 connotation」と表現されてよい。

この「入り子」および「鱗状」構成という構造主義用語が適切なのは、上記社会的諸関係(諸審級 instances)間の相互規定性(重層的決定 sur-détermination)を表示するからであり、それら諸過程の論理的(=時間的)継起性を表現するからである。

そして、それらすべてを通じて、社会的諸関係の、社会的意識諸形態への、ブルジョア的還元を、批判的に解明するからである。

社会的意識形態としての「私的所有」の法規範または法原理(権原)としての定着。そこに成立する法律的諸関係。それは、市民的(または政治的)国家の、「市民社会」(「社会の経済的構造」)からの外化=疎外において実現する。

この国家を最終総括とする市民社会の諸過程=諸関係の過程的=構造的統一。そのようなものとしての総体が、実は、労働の社会的生産諸力を現実形成させているのである。そして逆に、以上に略述した、社会的・政治的諸関係の総体は、そこに成立させられた生産諸力によって、具体的に内容づけられているのである。

ii 社会的生産諸力の重量性

上述の社会的生産諸関係の総体によって形成されるものであるかぎり、資本の生産力は、本質的に社会的な生産諸力として形成され、そのようなものとして存在し、その機能を発揮する。

この資本の社会的生産諸力については、その社会性が本質的に過程的統一性(入り子構造)として、また鱗状重層性(鱗状構造)として存在していることに留意する必要がある。この過程的統一性と構造的な重層性としての社会性は、ブルジョア社会の社会形成(発生)原理たる私的所有が経済的に運動するとき、それ自体の私的個別性を貫徹させながら、それを媒介する運動(交通)関係において、独自の構造的統一を形成せねばならぬ社会的必然性そのものである。

言うまでもなく資本は直接に私的な資本としてある。しかし、一つの私的資

本は他の私的資本と関連せねばならない。その相互間の交渉（交通）において、相互に必要なもの（諸自然質料と諸価値）が相互に獲得されあい、そこに資本体制としての自立性が確保されねばならぬ。私的所有に本質的な一属性たる競争が、この私的資本の社会的連関の必然性を媒介し貫徹する。したがってそこに、「社会的総（集合）資本 *ein gesellschaftliches Gesamtkapital*」を成立させる。そして、それを構成させた諸種の私的資本は、「社会的総（集合）資本中の自立した、そして言わば個体的生命 *individuelles Leben* を与えられた断片」として位置づけられ、「個体的資本 *individuelles Kapital*」または「個別的資本 *einzelnes Kapital*」として定義される。（K. II 353, ⑦ 458）

この *individuelles Kapital* という名辞は、類体における個体、類の本質的構成員としての個を表示することに力点のかかった名称である。マルクスがあえてこの名辞を *einzelnes Kapital* と区別して用いている場合には、前者を「個体的資本」後者を「個別的資本」と訳しわけることが必要である。これまで、前者は後者と同じ邦訳語で呼ばれてきたが、その場合には、「個別 *das Einzelne*」が論理学上「普遍 *das Allgemeine*」の対立的対概念であることが忘れられてはならない。

我々はここに「社会的総（集合）資本」と「この社会的総（集合）資本のエレメントとしての個別的諸資本」という対概念をうるのである。前者は「社会的資本」または「総（集合）資本」として短縮化され、後者は「個別諸資本」に短縮されて表示される。

このように表示されうる対概念としての資本において、近代市民社会の生産力は、形成されている。社会的資本＝総（集合）資本としての資本の社会的生産力。および、個別的資本としての諸資本の社会的生産力。

後者は、前者中にあってそれぞれ「自立した」ものであり、「いわば個体的生命」を与えられている「断片」＝「個別」である。

この個別としての諸資本の社会的生産力は、普遍＝集合（総）としての社会的総資本の社会的生産諸力を内的に構成する。と同時に、前者は後者によって逆に規定されている。

この後者による前者の規定のもつ決定的重要性がここで指摘されねばならない。なぜならば集合（総）としての普遍は、単なる集計以上のものであり、量的増大の質的転化への発展を実現しているものだからである。この量的増大の質的転化への弁証法を実現しているものとして「社会」が存在するのである。

[die bürgerliche Gesellschaft は、ここに物象的（交通）依存の Gesellschaft の展開であることによって、「社会的生産有機体 gesellschaftlicher Produktionsorganismus すなわち社会的＝「人間的 類体 menschliches Gattungswesen」なのである。]

社会的総資本の社会的生産諸力は、このような「有機体」的力能である。それはすでに一定の生産諸関係のうちに与えられて存在する。それは個別諸資本の生産力の総和以上のなものかとしてすでに存在している。

そして個別諸資本は、その生産諸力を社会的総資本の総体としての社会的生産諸力をそれぞれに享受しつつ、おのれ自らを形成している。しかしこの個別の諸資本は、私的所有の経済的運動主体として、この社会的総資本から自立した資本であり、それ自体の「個体的生命」を有している。この生命体としての私的個別資本こそが、近代ブルジョア社会における直接的主体であり、この個別資本こそが社会的総（集合）資本の主体的形成者である。

この資本世界の公民（citoyen）としての個別諸資本は、それが構成する社会的総資本との関連で顧みられるとき、その主体的本質が「直接に社会化された労働 die unmittelbar vergesellschaftete Arbeit」すなわち「共同的労働 die gemeinschaftliche oder gemeinsame Arbeit」であることが確認される。次節で論証するが、それは「協業」として実在する。それは、ブルジョア社会に固有な共同的労働であり、この社会独特の「類的力能」である。

個別諸資本の生産諸力が、その主体的本質において、生産過程で「直接に社

会化された労働」であることを人が確認するとき、人はまた、社会的総（集合）資本の主体的本質が、交通関係によって媒介された社会的生産関係における社会的労働である、ということを確認するのである。

このことはまた次の事を意味する。

個別諸資本の生産諸力が直接の社会的労働の生産諸力であるのに対して、社会的総資本の生産諸力はそれ自体の媒介性における社会的労働の生産諸力に他ならない。

したがって、一般に資本の生産力とは、以上に見たように、幾重にも重層した社会的生産力なのである。

iii 生産諸力と生産諸関係の矛盾の統一

以上にその核心を見た近代ブルジョア社会の生産諸関係と生産諸力とは、それ自らの自己矛盾を展開させつつ、その解決としての統一の形態を創りあげる。生産・交通・領有諸関係のそれぞれにつき、またそれら相互間につき、新しい社会的関係の形態を創造する。そしてまた、この形態において新たに創出される「生産諸力発展の形態」としての「生産様式」を進展させる。

資本家の生産様式は、その「労働様式」における技術的水準の発展に規定されて「マニファクチュア」形態から「機械制大工業」形態へ（そして今日では重化学工業形態へと）段階的に発展する。そしてこれに照応して、生産諸関係はおよび交通・領有関係において、次の様な新たな社会形態の創造と展開が見られる。すなわち産業資本からの商業資本の自立化、利子生み資本の独自の成立、「会社＝社会資本 Gesellschaftskapital」としての、産業・商業・銀行資本の編成、そして最後に近代的大土地所有の展開すなわち産業資本への従属。

これら諸関係の創出＝展開を通じての生産諸力の資本家的展開は、それ自体が、その主体的本質たる労働の生産力に対して敵対的である。価値からの価格の乖離を通じての価値法則の貫徹、貧困の蓄積に平行する富の蓄積としての資本蓄積の一般法則の貫徹、相対的過剰人口を不可避とする人口法則としての一般的法則の絶対的支配、利潤率の傾向的低落法則としての一般法則の君臨、資

本の生産物と土地の生産物にたいする市場価値法則の支配、経済学的三位一体範式の君臨。これらはいずれも、それ自体の本質に対する資本の敵対性を示している。

それらの諸関係の過程的展開の各地平を分節しつつ、それらを実徹する統一概念を、各地平の経済的範疇展開のなかで顕現させること。これこそ『資本』の課題であった。

それは、資本＝物象において転倒的に自己を表現している「集合（総）労働者 Gesamtarbeiter」の概念である（『資本』第Ⅰ部）。同じことであるがこの物象的転倒を揚棄する「連合した生産者 assoziierte Produzenten」の概念である（『資本』第Ⅱ—Ⅲ部）。

この概念は、遠く『哲学の貧困』においてブルードンへの批判的言及のなかで提起されたものであった。そして『要綱』において改めて展開された「社会的個人」概念の再展開に他ならない。以下節を更めて、順次これを論述する。

V 集合的労働者の概念

ここでは「資本の生産および蓄積過程」における労働過程の「社会過程」および「科学的過程」への「転化」という資本の生産力に固有な事態において、集合（総）労働の意義を確認する。ついで、この事態における「生産的労働」概念の敵対的二重性を検出する。そして、これを通じて、ブルードンの「社会——人格 société——personne」＝「集合力」論の内在的批判を確立しようとしたマルクスの理論的営為を明確化することにしたい。

行論に先んじて、あらかじめ次のことに注意を喚起しておきたい。

「経済学はロビンソン物語を好む」。

このことは周知のところである。「ロビンソンの明るい島」では彼が所有し使用する有用的諸対象とそれの生産に必要な相互に異なる諸種の仕事と、それらの産出にあたって彼が平均的に支出する労働時間との間の関連は、いっさい明瞭である。そして「この諸連関のうちに価値のいっさいの本質的諸規定が含

まれている」(K. I 82-3, ①178-9)。しかし自明のことながら、ロビンソンが産出するすべての生産物は彼のもっぱら個人的な生産物である。彼はこの島では社会的ならぬ個人である。したがって、そこには価値規定の内実が明示的に示される、と(ブルジョア社会との対質において)語ることは許される。しかし価値形態そのものが成立する根拠がそこには存在しないこと、多言を要しない。

価値の形態を欠いて価値規定の内実を物語るがゆえに、この物語りは、ブルジョア経済学によって愛好されるのである。

このブルジョア経済学のアイドルを、あの偉大なリカードゥさえもが共有した。かの“博学な”ブルードンもまた同様であった。

私的(労働)所有の物象(商品)形態での社会的交通が欠落しているこの人格的「生産有機体」とは異なって、近代市民社会では、個別的な労働が直接に類的(=社会的)な労働ではありえない。私的個人は直接に社会的個人ではありえない。彼の私的に個別的な労働は、その生産物が商品として他人に購買され、この他者の使用価値たる実をあげることによって、その社会的性格が確認されるのである。つまり彼の個体的労働は、交換の媒介によって事後的に社会的労働たることが確認されるのである。私的資本の産業資本としての社会的性格もまた、これと同様である。

私的資本は、社会的総=集合資本としての産業資本の自立した諸個体=個別者としてのみ、社会的に運動するのであり、この個別としての資本に物化している労働の生産力もまた、社会的総(集合)労働の生産力として意義あるものなのである。そしてこの社会性は交通(=流通)関係の媒介によって、つねに事後的に確認されるものである。

このような過程性=媒介性によって特色づけられるものであるとはいえ、私的な個別諸資本に物化している労働は、それ自身が、社会的総=集合労働の成果とその内実を享受している。

しかし、それら私的な個別諸資本の主体的本質たる労働の生産力は、社会的

総(集合)資本のそれに解消されつくすものではない。それは、それ固有の生産力を獲得し開発しようとする自立した個体的生命体である。それは、それぞれの個性＝個性として、それ自身のうちに「直接に社会化された労働」すなわち「共同労働」の組織体であろうとするものである。

後者における工場内での分業を通じての協業は、それを構成する諸労働者の個人的諸労働の総計以上のものである。このことは、前者における社会内での交通関係によって媒介された分業にもとづく協業の生産力が、その協業構成員の生産力の総和以上のものであると同様である。この点で両者は等しい性格を共有する。このことは確認されねばならぬことであるが、しかしこのことをもって両者を混同することは許されない。

A. スミスはこの混同を無自覚的に行なった。スミスからこの集合力の理論を学んだブルードンは、この混同を意識的に行なった。それゆえにマルクスは『哲学の貧困』においてこの点を批判したのであった。すなわち「ブルードン氏は社会を人格化する。社会を一個の人格としての社会にする。……そしてこの一人格としての社会は……諸人格としての社会では決してないのである。ブルードン氏はこの集合的存在の人格性を理解しなかったといって経済学者たちを非難しているのである」(『Misère de la philosophie, Éditions sociales, 1972, p. 100, 『マルクス・エンゲルス全集』第4巻 117ページ)。

このブルードンの「集合力」理論すなわち「社会一人格 société-personne」論による「社会的剰余」の「超過価値 mieux-value」としての成立の論証。これを論駁すべく、『要綱』のマルクスは、「増加価値 plus-value=Mehrwert」の概念把握のために、相対的剰余価値生産の機構を検出し、前節で略述した構造的層性＝過程の統一性としての社会性の規定における「人格」＝「個人」を措定し返すことができたのである。すなわち、資本家的生産様式に照応した生産＝および交通・領有諸関係を検出し、その敵対的矛盾を開示して、ブルードンの「社会一人格」論に対置してきたのである。【ブルードンの有名な労働紙幣論は、この無媒介的な「社会一人格」論の一系論に他ならない】。

それは、批判としての社会科学的認識の展開である。マルクスがそれらの呈示において、ブルードンの地平（ブルジョア性）を越えていることは、疑いえない。しかし、「経済学におけるルター」たるスミスからブルードンが、彼なりに学びとって、その社会認識＝および闘争の基底に据えた社会的人格概念を、おのがものへと批判的に吸収し、それが不可避にまよっているはずの形態諸規定を確認し、その理論的展開を進めることによって、この概念を指定し直したこともまた否定しがたい。ブルードンへの批判は、マルクスにとって、問題圏の摂取であり、その積極的解明の、自己自身への課題設定であった。彼がこの課題をあえて引き受けたのは、ブルジョア社会批判の理論的範疇展開が、社会的変革主体の意識的形成に積極的に資すべきものである、と、彼が確認していたからに他ならない。

ブルジョア経済学批判としてのブルジョア社会批判の著述体系。その全過程＝総地平において、彼は自らに課した任務を遂行しようとした。『資本』においては、それはまず「資本の直接的生産過程」（＝第一部）において本質論的な範疇展開が進められる。そして、そこにおいて、ブルードン（＝ブルジョア経済学）克服の基礎概念として指定される。

それは、（すでに指摘しておいたところであるが）私的な個別資本の主体的本質の規定たるものであるが、即自的には社会的総資本の規定と同一な内容を備えている。

それは、社会的交通（総流通）関係によって媒介された社会的総資本の主体的本質を内的に構成する。と同時に、これによって規定しかえされる。

以下に、この概念をめぐる要点を、三点において、概説する。

i 労働過程の社会的過程への転化

——結合労働＝協業の敵対的二面性——

資本の直接的生産過程としての生産＝蓄積過程において、資本は、その主体の本質において「集合（総）機構 Gesamtmechanismus」に組織された多数の

勤労諸個人の「個体的生産諸力 individuelle Produktionskräfte」の結合体、すなわち「社会的集合（総）労働者 gesellschaftliche Gesamtarbeiter」または「結合された集合（総）労働者 kombinierte Gesamtarbeiter」として、実在する。

この Gesamtarbeiter はマルクス自身によって *travailleur collectif* とフランス語化されている。したがって「全体労働者」、「総労働者」という邦訳語は原意を十分に表現していない。その「集合」たること、「共同的な」ものであることが、受けとめられねばならない。

この集合（総）労働者の特質は、労働諸個人の人格性のうちに歴史的に形成されてきた社会力としての彼ら労働者の肉体的精神的自然力をエレメントとしている、というところにある。またそれは、「数学的に確定的な比率」において「諸種の質的に異なる諸器官」として勤労諸個人(体)を編成し、それを「原基的な生産有機体 *elementarischer Produktionsorganismus*」＝「労働体 *Arbeitskörper*」として機能させることにある。

かくしてこの集合（総）労働者は「協業労働者 *kooperierende Arbeiter*」または単に「協業者 *kooperierende*」としての規定を受けとる。それは「協業そのもの」の人格的定在たるものである。それは、ブルジョア社会において資本が意識的に形成する一種の共同態 (*Gemeinwesen*) である。それは、その構成者たる個別の労働者の個人的諸制限を越えて、「一つの種属力能 *ein Gattungsvermögen*」を展開する。それは、いわば「前にも後にも手と目を持っており、一定程度の遍在性 *Allgegenwart*」を内有している。

このようなものとしての「直接に社会的な労働」＝「共同労働」の生産力、また、この意味での「労働の社会的生産力」こそが、「資本の内在的 生産力 *immanente Produktivkraft*」たるものである。かかる「一集団力 *eine Massenkraft*」が私的資本の「一私的力 *eine Privatkraft*」として「一生産力 *eine*

Produktionskraft」であること、前号で指摘しておいたとおり。

この私的な個別諸資本は、上記の意味でそれ自身が社会的（＝普遍的）な性格をすでに有するのであるが、そのような私的諸個別資本としての生産過程の展開は、それら相互間に、社会的総流過程に媒介された「社会的労働過程の質的編成ならびに量的な規制と比例性」を確立させる。したがってそこに二重の意味で「労働過程の社会的過程への転化」（K. I 351 ③561）が進展する。同じく生産過程は社会的生産過程として展開する。そして、かかる「社会的総生産過程」の個別的一部分として、私的諸資本の生産過程が実在する。

この生産過程における労働過程の社会的過程化または社会的な共同的労働の展開。それは、単に労働の生産性の上昇を我がものにするという点のみならず、共同性＝社会性としての人間的本性の展開を我がものとするという点において、人類史的発展を表示するものである。それは新しい「社会的欲求」の創造とその充足可能性の創出において、またこの創出の共同性と社会性の領有において人類史発展の表現たるものである。

しかし、このポジティブな発展契機は、そのものがネガティブな自己破壊的契機たるものである。なぜならば、協業者たる集合労働の生産力の発展は、その内的構成者たる勤労諸個人の個体的生産力の貧弱化と破壊の上に成立するものだからである。労働者の部分労働者化、一面的機能への生涯的繫縛、諸機能の階統的秩序への固定化、資本家の専制支配、知的生産諸力能の労働者からの疎外、等々。これらの犠牲において、協業のマニュファクチュア形態は、労働の社会性、集合性、共同性を獲得する。それゆえ「集合（総）労働者したがって、資本の社会的生産力の豊富化は、労働者の個体的生産諸力の貧弱化によって、まさにもたらされるものである」（K. I 379 ③599）。

こうした勤労諸個体の犠牲による社会的生産力の発展という転倒的・敵対的な事態の進展は、マニュファクチュア形態を技術的に越えた協業の諸形態においても、特に次項で再論する機械大工業においても、貫徹する。それらの形態が、資本としての生産諸力の展開形態たる資本家的生産様式の諸形態であるか

ぎり、本質的事態に変化はありえようもないのである。

「資本家の生産様式は、一方では労働過程の社会的過程への転化のための歴史的必然として現象するとすれば、他方では労働過程のこの社会的形態は……労働過程をより有利に利用する（搾取する *ausbeuten*）するために資本によって用いられる一方法として現象する」（K. I 350-1 ③561）²⁾

ii 労働過程の科学的過程への転化

——普遍的・共同的労働の敵対的転倒性——

資本家の生産様式の機械制大工業形態は、「機械による機械の生産」によってその技術的基礎を自立させ、「作業機」（特に「本来的道具機」）の開発による「人間の手の排除」の可能性を極限にまで推進する。この道具機の革命は、「発動機」（蒸汽機関等）の革命的改善を必然化し、それに照応した「伝導機」の発明と装備によって、巨大な自然諸力の利用を可能にする。この「手労働」「人間の動力」の限りなき排除の可能性の追求。これは資本家の生産様式の機械制大工業形態での必然事であり、そこには「生産の連続性と自動原理の実現」とが人目をひく。

この生産様式は、上記の追求において「機械工学と科学との技術的応用」を主要産業に強制し、それらにおける「機械的科学的革命」を不可避ならしめる。そしてまた、それら工業上および農業上の生産様式での革命は、「社会的生産過程の一般的（普遍的）条件たる交通＝および運輸手段の革命」を必要ならしめた。そしてそこに、社会的生産過程の「世界市場連関」を形成させ、「河川船舶・鉄道・大洋汽船および通信の体系」そのものを「大工業的生産様式に適応させ、そこに巨魔的な社会的自然的生産諸力を展開させた。そこでは「自然

2) 労働の社会化について

労働の社会化という事態は、資本家の生産様式における「協業そのもの」の内容を示すものであり、「社会的生産過程」そのものの体制としての人類未来＝本史に向かった促進的＝進歩的一要因たるものである。しかし、この発展的契機は、本文中に記したように、それ自身が自己破壊的契機をなすものでもあり、それが資本＝物象の包摂＝支配力の内延的展開の強力化であるかぎり、まさに反動的なものである。この点、一部に誤読にもとづく謬見が見られるので、念のために記す。

諸力による人間力の置き代えと自然科学の意識的応用による経験的熟練の置き代え」がドラスティックに展開する。

それは、人間力を必要とする限りでは、その分業形態を絶えず組みなおし、そこに新しい質の労働を生じさせる。すなわち、もはや筋肉と骨格を駆使する労働ではなく、「眼で機械を監視し、手で機械の誤まりを直す新たな労働」(K. I 391 ③615)がそれである。これは「神経と脳髄を消尽させる」(ibid.)新種の労働形態である。それは機械の運転という姿での科学・技術の産業的応用の一般化に他ならない。

ところで、機械の発明を含む「すべての発明」「天文学上の発見を含むすべての発見」および自然諸科学の諸学科における「すべての科学的労働」は、その遂行者が単独でその作業を推進する場合においてさえ、直接的に社会的＝人間的な活動である。この意味においてそれは、「普遍的労働」である(K. III 125, ⑧173)。

産業に導入される機械、自然科学の知識(「理論的概念」と技術は、このような普遍的労働の所産であることが、今ここで確認されねばならない。そして、この機械を作動させる労働は、それ自体が「社会化された、すなわち共同的な労働」であること、これもまた確認を要する(K. I 404, ③630)。機械の操作は「主労働者」と「補助者」または「助手」の編成を必要とし、それらの諸機能は、「成年労働者」と「児童」、「男子労働者」と「女子労働者」等の特殊の諸力能の類的＝普遍的力能への編成において、遂行されるからである³⁾。

3) 機械制工場における「共同労働」の編成は、遠く『哲学の貧困』以来注目されてきたところであるが、マルクスは『要綱』時点においてこれを「客体的アソシアション」として規定し、「自由なアソシアション」への転化の根拠＝必要性和見なしていた。そしてそこに「工場制度」を「社会革命の出発点」と宣言したR・オーウェンの主張の歴史的真實性を確証した(K. I 529, ③797 cf. Gr. S. 602, III 663)。

『資本』では「客体的生産有機体」として規定され、「自由人の連合」としての「社会的生産有機体」への転化の必然性を宿すものとして措定される(cf. K. I 404, ③630 K. I ④181)。

『要綱』『資本』における上記の規定は、そこでの協業者としての集合(総)労働者が、交通(流通)諸関係を、「彼ら自身の社会的関連」として我がものとするにおいて、自己自身を実現するものであることを含意している。

この意味において「普遍的労働と共同的労働とは相互に区別されねばならない。しかしこの両者は生産過程において、それぞれの役割を果たし、相互に交錯しあう」(K. III 125, ⑧ 173)。すなわち、普遍的労働も、共同的労働をなす特殊諸機能の総連関(学問的分業)において遂行され、共同的労働もまた「一労働体」として普遍的労働たる実をあげるのである。すなわち「人間精神の普遍的労働のあらゆる新展開と、[共同的な]結合労働によるその社会的応用」(K. III 101, ⑧ 144)とが相共に進む。ここにおいて「労働の技術的性格が、[機械などの]労働手段そのものの本性の命ずる技術的必然性となる」(K. I 404, ③ 630)。

かくして「生産過程内における、直接に社会的な、社会化された労働、すなわち、直接的協業」(K. III 125, ⑧ 172)が展開することになる。これは、それ自体としては、人類発展史における未来形成的要素である。このことを、人は確認することができる。

しかし、この労働過程の科学的過程への転化として特徴づけられる事態は、自己矛盾的なものであり、上記の進歩的要素そのものが自己否定的な契機なのである。

機械制大工業としての「近代工業の技術的基礎」が、いかに「革命的」であり、「社会的分業の変革」をいかに推進するものであるとはいえ、それは、資本家的な生産様式の技術的な基礎である限り、他人労働の支配と搾取を揚棄しえない。つまり、資本の本性を自ら廃絶しえない。資本家的生産様式は、人間の排除の可能性を最大限に追求する反面では、他人労働の無償利用の形態として「骨化した旧式分業」を維持するのである。また、新式分業においては筋肉労働の軽減が、神経消磨労働の増大に転成し、総じて労働の内容を失ない、退落した精神労働が一般化する。そしてそれ自体が新しい精神的肉体的苦悶となる⁴⁾。

4) この点でもフランス語版はより明析である。「機械労働は、神経系統を極限にまで刺激するのであるが、それと同時に筋肉の多面的な活動を抑圧し、肉体と精神の自由な働きを一切抑圧する。この意味において労働の軽減さえもが責め苦となるのであり、また、この意味において機械は勞

また、この生産様式における共同的労働＝結合労働の展開は、類的編成における人間的諸力能の開花ではなく、「性と年齢の区別なき労働者家族全員の、資本の直接的統治の下への、編成」であり、女性や未成年の精神のおよび肉体的諸力能の退落と破壊に結果する。成年労働者にあっても「都市労働者の肉体的健康と農村労働者の精神的生活の破壊」(K. I 531, ③ 800)が一般化する。

最後に、普遍的労働がその正反対物に転化する。それは、そのものとしては人間的類活動であるはずのものでありながら、資本＝物象の私的活動として現実に機能する。人間の「知的諸力能 *puissances intellectuelles*」が、そして「諸科学 *sciences*」が「他人の所有」となり、「資本の権力」となる。そしてその成果は、資本が獲得した無償の生産力として、「機械の価値の、機械の大きいさおよび効率に比しての縮減」として、つまり「不変資本充用上の節約」として、ブルジョア的に機能するのみであって、かの普遍的労働と共同労働との交錯における教育と労働との結合は、その可能性として放置される。そして資本の権力の増大に帰結する。

この点についてフランス語版『資本』は、ドイツ語版以上に、明白である。この版は、労働の科学的過程への転化について、ドイツ語版より明白にその肯定的意義を表示すると同時に、その否定的意義についても、より明確である。

「生産の知的諸力能は他のすべての方面で消滅するがゆえに、ただ一つの面で発達する。部分労働者の失なうものが、彼らに対立して資本のうちに集積されるのである。マニュファクチュア分業は、その部分労働者たちにたいして、生産の知的諸力能を、他人の所有として、自己を支配する力として、対立させる。この分離は……マニュファクチュア分業において発展するのであるが、大工業において完成する。大工業は科学を、労働から自立した生産力に創りあげ、資本に奉仕させるのである」(Lachâtre p.157 cf. K. I 379 ③598)。

働から労働者を解放するのではなく、労働から彼の関心を剥ぎ取るのである」(Lachâtre p. 183 cf. K. I 444 ③ 684)。また「果てしない労働の退屈きわる画一性」のもとの「労働者にたいする専制権力たる資本の労働法典」がその支配を貫徹するのであり、この意味で、機械労働を普遍化させる工場制度は、近代資本主義体制の根幹をなすのである (ibid.)。

「機械大工業は、最後に……筋肉労働と知的生産諸力能との分離を完成させ、この知的力能を、労働にたいする資本の権力に転化させる。労働者を雇用する資本家の権力をなすところのこの驚くべき科学・巨大な自然諸力、そして機械体系に合体したこの巨大な社会的労働の前では、労働者の熟練は見る影もなくなる」(Lachâtre p. 182 cf. K. I 444-5, ③ 685)。

普遍的なる科学の私的な資本＝権力への転化、それは、科学と科学の私的独占との現実的同一視である。それは、「(資本家たる)雇い主の頭脳では、機械にたいする彼の独占が、機械の实在と混同される」(ibid.)のと同様である。それはまた「社会的生産過程の発展による生産性の増大が社会的生産過程の資本家的利用(搾取)による生産性の向上と混同される」(ibid.)のと同様である。

我々がここに見た *Quid Pro Quo* (錯視＝混同)。この転倒性。

再度、記そう。機械と機械独占、科学と科学独占、知識と知識独占【情報と情報独占】、社会的労働とその私的物象化＝疎外。

言い換えれば工場制度の展開に伴う教育制度の普及(ブルジョア子弟用「理工科大学校および農芸大学校」とプロレタリア子弟用「職業学校」(Lachâtre p. 211)は、相共に、労働の社会的(共同のおよび普遍的)生産力のブルジョアの転倒性の一表現である。

ここでは、ブルジョア社会にふさわしく、「男ぶりのよいのは境遇のたまものだが、読み書きのできるのは生まれつきだ」(K. I 89, ①190)というアフォリズムが妥当する。

iii 生産的労働の敵対的二重性

労働過程の社会的過程化と科学的過程化を通じて、結合労働の敵対的二面性と普遍的・共同的労働の敵対的転倒性とは顕在化していくことを我々は、以上の叙述のうちに見てきた。それは資本としての集合(総)労働者の概念そのものにおける敵対的矛盾の開示に他ならない。このことを確認するとき、我々は

ブルジョア社会における生産的労働もまた、その敵対的二面性によって特質づけられるのであり、その敵対的自己矛盾性が、その敵対性を自ら解体させざるをえないゆえんに我々は当面するのである。以下、その最小限の要求を開示する。

人間は、自然のうちなる人間的な自然として、人間と自然との間の物質代謝を、意識的に媒介しなければならない。この媒介活動たる労働は、「その結果たる生産物の観点から考察するとき、生産的労働として現われる——労働手段と対象が二つとも生産手段として現われるのと同様に」(Lachâtre p. 78 cf. K. I 189, ② 335)。この意味では生産的な労働は永遠の必然事である。それは、人間としての人間の確証たる行為である。したがってまたそれは、人類史の能動的な創造活動である。

この本質的規定における生産的労働は、自らの目的を意識的に追求する対象的な自己活動であり、そこでは「肉体的労働と知的労働とが分離されざる絆によって統一されている」(ibid.)

この対象的な自己意識活動は、素朴に「人間が自己の必要(欲求)にとって外的な対象を我がものとするにより、生産物を創造する」(ibid.) こととして表現されている。

このような活動が通常に遂行され、それが生産的(=多産的)なものとして承認されるのは、人間たる者の幸福の証しであろう。

近代ブルジョア社会にあっては、資本が生産資本として機能し、その本質的未完結性に衝き動かされて、生産としての生産を遂行するとき、それは、上記の定義における生産的労働を極めて大規模に、そして、終結することなく展開する。

しかし、この生産資本の主体的要因たるものとしての資本としての生産的労働は、上述してきた集合(総)労働者の活動である。生産的労働は、新たな規定を与えられる。ポジとネガの両面において。

それは、「ただ一人の人格と見なされる集合(総)労働者」による物質代謝

の過程である。したがってその構成各員による「諸自然質料への参加の度合」は「近くとも遠くともよい。」そのみならず「この加工に全く関係をもたなくてもよい」(ibid.)。「生産的であるためには、自ら仕事に手を出す必要はもはやないのである」(ibid.)。「技術者」「科学者」が、そしてまた「学校教師」が、ここに、生産的労働の遂行者の一員に加わる。かくして、これらの社会的カテゴリーを含む生産的労働遂行者総体の「社会的または共同的生産物」として資本の生産物(W)が存在する。それは、前項以来述べてきたように科学技術の開発と応用を進展させる普遍的・共同的労働の交錯的發展とその成果の高さを、表現するものでもあると同時に、それを保障するものでもある。

しかし、このようにその範囲が拡大された生産的労働の概念は、資本のもとでは同時に縮小する。「労働者が一般的に生産するというだけではもはや十分ではない。彼は剰余価値を生産せねばならぬ。資本家のために剰余価値を生産するもののみが生産的である」(K. I 534, ③ 804)。

いまや学校教師は「児童の頭脳を加工するのみならず企業家の致富のために自ら苦役する場合」に限って生産的なのである(ibid.)。

この生産労働概念のブルジョア的限局性、それは、先に見た人類史的拡大性を制約する、「それ自身の裏面」(「メダルの反面」)である。

この裏面に制約されてのみ、その表面は存在する。したがって、かの人類的幸福はブルジョア的不幸に反転する。したがって、いまでは、次の様に定立されねばならぬ。「生産的労働者の概念は、活動と有用的効果との——労働者と労働生産物との——一関係を含むばかりでなく、労働者を資本の直接的増大手段たらしめる独自の社会的な・歴史的に成立した一生産関係を含む。それゆえ、生産的労働者であるということは幸福ではなく、むしろ不幸なのである」(ibid.)。

この不幸な活動として意識される生産的労働。それは、^{○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○}不幸な自己意識活動としての対象的活動である。したがってまたそれは、敵対的に分裂する自己二重化の意識であり、いまだその分裂を揚棄しえない活動である。それは、それ

自身の矛盾のエネルギーな解決の不断の追求＝過程に他ならない⁵⁾。

それは、資本の私的力として包摂され物象化している集合（総）労働者の、対象的活動における自己解放の不可避免的な欲求を、勤労諸個人の人格＝身体性のうちに宿らせる。

そこに成立する敵対的自己矛盾としての「生産的労働者の概念」。それは、そのブルジョアの発現形態たる資本家的生産様式を、人類発展の必要な、だが経過的（消滅的）な一形態として、一段階として、措定する。

5) 不幸なものとしての生産的労働者の規定は、社会的自己意識の非自立性＝被制約性の、自立性への転化、己れ自らの物象的被支配性の主体的克服を、それ自らの社会的欲望たらしめることを含意している。この意味において、『資本』における「生産的労働者の概念」は、ヘーゲル『精神現象学』「自己意識」篇における「不幸な意識」に遠く呼応している。